

明治中期国語辞書の国語学史的研究 要旨

河瀬真弥

本論文は、明治中期国語辞書を分析し、明治中期国語辞書の位置づけの再考を目指すものである。考察の対象とする辞書は、明治時代を代表する国語辞書である『言海』（大槻文彦著、1889～1891年）と、それに対抗するものとして作られた『日本大辞書』（山田美妙著、1892～1893年）である。また、本研究は、辞書を言語資料としてではなく、言語研究の成果として捉える、国語学史的研究である。前半（第一～五章）は『言海』についての論、後半（第六～十章）は『日本大辞書』についての論である。これらに加えて序章、終章を付す。

序章「明治中期国語辞書史の語り方」では、本論文の目的を述べる。明治中期国語辞書研究において『言海』は優れていて、『日本大辞書』は稚拙であるという評価が存する。この評価は確かに辞書の特徴をよく捉えてはいるが、既存の評価が固定されることにより、見えづらくなる特徴もある。明治中期国語辞書の性質を捉えるには、従来の評価は偏った見方によるものであると言える。そのような偏った見方により見落とされてきた特徴を把握することを、本論文の目的とする。既存の評価の原因としては、辞書編纂の過程が語られる時、過度に物語化してしまうということが考えられる。また、従来の観点が取りこぼしてきた特徴を見出すためには、個々の辞書全体にわたる計量的な研究手法ではなく、社会学の質的調査が個々を重視するのと同様に、辞書の個々の記述を深く読み解く手法が有効ではないかとする。そして、辞書編纂のあり方を考察するにあたって、用例と語源説に注目することが有効であることを述べる。

第一章「『言海』における『増補雅言集覧』利用法について——をしね（小稲）の用例——」は、『言海』における『増補雅言集覧』の利用法を再考することで、『言海』の編纂態度を明らかにしようとするものである。まず、『言海』の「をしね」の用例に石川雅望（編）中島広足（増補）『増補雅言集覧』からの孫引きがあることを指摘する。その上で、辞書などで「孫引き」という語自体の用例を調べたところ、孫引きを是としない価値観が『言海』の時代に既にあったことが確認される。また、大槻文彦自身も孫引きが誤りにつながることを自覚していたことが大槻文彦自身の記述から分かる。そのため、『言海』

編纂が、孫引きに頼らざるを得ないほどの困難な作業であったと解釈されうる。そして、誤りにつながる可能性がある中で用例を孫引きするということは、少なからず『増補雅言集覧』を信頼していたということも言えるだろう。先に述べた編纂の困難さを併せて考えると、『増補雅言集覧』を信頼せざるを得なかった、ということが言える。

第二章『言海』の用例掲出において重視されたことは何か——動詞「しのぶ」による仮説と導出される『言海』の特徴——は、『言海』の用例において何が重視されたのかという問題を、動詞「しのぶ」の用例から明らかにしようとするものである。「しのぶ」条には編纂過程が反映されたメモが残るため、分析に適している。「しのぶ」の用例分析から、活用型が確定できる用例を挙げること（〈重視されたことⅠ〉）、意味の分類に求められる文脈を提示して、細かいニュアンスを漏らさないようにすること（〈重視されたことⅡ〉）の2点が『言海』の用例において重視されていることであるという仮説を立てた。そして、以上の仮説に基づくならば、『言海』の文法規則への厳格性は、用例にも適用されていること、意味の分類が用例検討に先んじており、その分類が妥当であることを用例で証しようとしていたことが特徴であるとする。さらに、〈重視されたことⅠ〉は合理的であると考え。一方で、〈重視されたことⅡ〉は文脈の重視自体には合理性があるものの、語義の不必要とも思われる細かい分類には合理性が認められず、分類の妥当性を用例で証することも、疑問に思われる手続きであるとする。

第三章『言海』の短文用例に見る文法研究の理念——付、『言海』の構造化記述に関する問題——は、『言海』における短文の用例について論じるものである。具体的には係助詞の「なむ」の用例の挙げ方と、その背景にある国語研究の理念について述べるものである。『言海』の係助詞「なむ」の用例は大槻文彦による作例であった可能性がある。そして、作例を掲出する背景には、文法上の法則を改めて実証すること以上に、既に分かっている法則を用いて文法体系全体の構築に力を注いだことがあるのではないかと考えられる。また、反対にあえて実例を用いている箇所については、何かしらの実証を求めている可能性を考えなければならないだろう。このように『言海』からは文法研究の理念を読み取れる可能性があり、辞書研究を文法研究史全体とも関わらせていくべきである。また、補足として、構造化記述による『言海』データベースを作成する際には、このような作例があることを出典の情報付与の際に考慮すべきであることを述べる。

第四章『言海』において「牽強」「強牽」「附會」「鑿」とされる語源説については、『言海』の語源説の特徴を論じるものである。『言海』の語源欄においてこじつけである

と否定される語源説の方法の中には、『言海』が別の語の語源説で適用している方法がある。よって、ある語源説の方法を一律に否定することはなく、あくまでもその説の当否をその語に応じて分析しているということが分かる。

第五章「『言海』語源欄における漢字表記注記考——正統ではないとする漢字表記注記について、判定の根拠と注記の目的——」は、『言海』の語源欄において、ある漢字表記を正統ではないと否定する根拠と、正統ではないものを辞書中に取り上げる理由を考察する。「正統ではない」表記とは、衣類の「さしぬき」について「奴袴トスルハ非ナリ」とするようなものである。正統でないとする根拠は、語の意味が漢字の意味と合わないこと、音訓を交えた「湯桶読」（今日の重箱読みを含む）となること、仮名遣いの齟齬が生じることの3つが挙げられる。また、正統でない表記は誤った語源説に繋がるため、懸念を表明しておくことが、それらの表記を取り上げる理由ではないかと思われる。

第六章「『日本大辞書』における用例収集法の研究 序説——中古文学における「あさまし」を例に——」は、『日本大辞書』における用例収集を分析するモデルケースとして、「あさまし」条を取り上げるものであり、先行辞書によらない独自の用例収集が試みられていることを論じる。独自の入念な用例収集が行われているということは、国語史資料としての『日本大辞書』の信用性にも関わる（ここでの「信用性」は肯定的な意味合いである）。

第七章「『日本大辞書』の近世文学用例より考察する山田美妙の辞書編纂法」は、『日本大辞書』に見られる近世文学の用例について、どのような観点から用例を集めたのか、どのような文献から用例を集めているのかを明らかにするものである。まず、『日本大辞書』では近世文学の調査文献をある程度絞っていることが明らかとなる。続いて孤例か、それに近い珍しさの用例を採録していることから、見出し語を先に定めるのではなく、文献を調査する過程の中で見出し語そのものを定めていることが明らかとなる。そして、孤例か、それに近い珍しさをもつ語について、山田美妙自身も珍しい語であると分かっているながら『日本大辞書』に採録した可能性がある。そしてそれらの珍しい語も「普通辞書」に含まれていて構わないと考えていた可能性がある。以上の考察は、『日本大辞書』が近代語研究に有用であるとされる昨今の動向の中において、珍しい語が含まれていることに注意して利用する必要性を喚起するものでもある。

第八章「『日本大辞書』の「誤り」を捉え直す——連歌用例をめぐって——」は、『日本大辞書』に見られる用例の誤りを取り上げる。本章では連歌について特に取り上げる。

『日本大辞書』の「いとけなし」の条では、連歌の例を『源氏物語』の例だと誤って示している。この要因としては、「いはけなし」「いときなし」の用例が『源氏物語』に見られることから混同が考えられる。このような混同の背景には、連歌と『源氏物語』を同一の位相として扱おうとした山田美妙の態度があると考えられる。

第九章「『日本大辞書』が国語辞書史にもたらしたもの——『帝国大辞典』『大日本国語辞典』を例に——」は、『日本大辞書』が国語辞書史にもたらしたものは何だったのかを考察するものである。まず、『日本大辞書』と、その後に刊行された『帝国大辞典』の関係を考察し直す。具体的には、『日本大辞書』の近世文学用例が『帝国大辞典』の編集者に評価された可能性があることを、『帝国大辞典』の編集背景から探った。続いて、国語辞書史上重要なものの一つである大正期の国語辞書『大日本国語辞典』において、『日本大辞書』がどのように取り入れられているかを調査することにより、『日本大辞書』が後年の辞書編纂者からどのような評価を受けていたかを明らかにする。『日本大辞書』と『大日本国語辞典』には共通する用例がいくつか見られる。また、『日本大辞書』が出典を誤っている箇所、『大日本国語辞典』が誤りを継承している箇所がある。そのため、『大日本国語辞典』の編纂者である松井簡治が、『日本大辞書』の近世文学用例収集を評価していたと言える。『帝国大辞典』と『大日本国語辞典』の例を合わせて考えると、『日本大辞書』が国語辞書史にもたらしたものは近世文学の用例である、と結論づけられる。

第十章「『日本大辞書』における音義説の位置」は、『日本大辞書』に見られる音義説の影響を指摘し、山田美妙が音義説のどのような部分に惹かれたのかを考察しようとするものである。『日本大辞書』には、音義説の代表的資料である平田篤胤『古史本辞経』からの影響を受けた可能性がある箇所がある。また、山田美妙が音義説に惹かれたのは、普遍的な音調法則を探究することと音義説の親和性が高かったからではないか、という仮説を立てる（山田美妙が言語一般の法則に関心があったこと自体は既に指摘がある）。また、山田美妙の音義説的説明には国粹主義的なところは見られない。この点も音義説受容史として興味深いと言えよう。

終章「明治中期国語辞書を語り直す」では本論文の総括を行った。まず、これまで評価されてきた『言海』にも瑕疵があり、これまで否定的評価が常であった『日本大辞書』にも長所があるとする。また、辞書の巧拙を評価する・しないという観点を取り払うということによって、これまで見えづらかった『言海』や『日本大辞書』の特徴が明らかになったとする。さらに、国語辞書を国語学史の資料として活用できる可能性も指摘できる。最

後に、『言海』にも『日本大辞書』にもそれぞれ試行錯誤が見られることから、明治中期という時代を、国語辞書における試行錯誤の時代と捉える。この、試行錯誤の時代、という観点で他の同時代辞書を分析していくこと、及び、この観点の有効性と限界を確かめていくことが今後の課題である。